

初めにロゴスありき

住 谷 悦 治

靈魂のないからだが死んだものであると同様に
行いのない信仰も死んだものである。

ヤコブの手紙 第二章二六節

ロゴスと「言」と「業」

新約聖書「ヨハネによる福音書」の第一章第一節の第一行に「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった」という有名な聖句がある。英語では In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God. じつこの最初の「初めにことばありき」についでさまざまな問題をとりあげて、平素のわたくしの考えを述べてみたい。聖書の、以前の訳では、もつと現実近く、この一節が「太初に道(ことば)あり道は神と偕にあり道は即ち神なり」となっている。ドイツ語

では Im Anfang war das Wort であるが、原典は ロゴス Logos である。ロゴスの訳字は、字典には「神の道(ことば)」が第一位に置かれ、つぎに「言(ことば)」という訳字が置かれてあるようだ。以前の聖書ではその第一の訳「道」を「ことば」というふり仮名をつけて実践を想わせる意味で使用していたのであるが、現在の聖書の訳字が果してより優れているかどうかは問題である。わたくしは、その優劣をここで論ずるというよりも、その原典のロゴスが、「ことば」という日本語とは異った意味で理解した方がよいという意見を高等学校時代からもっている。それはゲーテ Goethe の「ファウスト」"Faust" のはじめの方の「書齋」"Studierzimmer" を読んでいろいろの数十

年来の持論であるが、ゲーテはファウスト博士に言わせている。そこでファウストは「聖書」のこのヨハネ伝第一章第一節のロゴスを本当の意味で良いドイツ語に訳してみようと努力している。はじめに通俗に従って「初にロゴスありき。ことばありき」(森鷗外は「語」(ことば)という訳字をあてている)すなわち *Im Anfang war das Wort* (Wort ことばは Logos の意味を正しく移していないと考え^え、ついで *Im Anfang war der Sinn*「初に意(こころ)ありき」と訳し変えた。その訳字にも疑いがあるので、「初めに力(ちから)ありき *Im Anfang war die Kraft*」と訳した。しかしそれもロゴスの訳字としては満足でないので、「不意に思(ふ)つて」*Im Anfang war die Tat*と訳し変えた。ロゴスはタート(行い・行動)が通訳であるといつてファウスト博士は満足した。(森鷗外は「初に業(わざ)ありき」というように *Tat* を「業」(わざ)という日本語を与えているが、「言」でもなく、「語」でもなく、「意」(こころ)でもなく「力」(ちから)でもなく、「行い」「行動」「業」という字の方がロゴスの真の意味を移しているという点において、ゲーテの苦心の理解を思う。「太初」にあったものがタートとしてのロゴスであるという考え方は、「聖書」の訳字にこだわらないでも、人間としての生活態度としても社会としても初めであり終りであると考ええる。わたくしはロゴスをタートというドイツ語に移したファウスト博士に敬意を表しつつづけてきた。

同志社学園にはいま高い訓言や美しい言葉が満ちている。そのよき言葉には微力のわたくしなどは重荷すぎて背負いきれまい。しかし、日ごとの現実果して、その何分のいくつが実現しているであろうか。「言うは易くして行は難し」のことわざの通りである。もちろん日ごとになれわれの行動を規定し、鞭達し、反省せしめ、一歩でも二歩でも社会的な立派な人間となるよう成長への努力のための良き言葉、美しき訓言は必要である。われわれの行為は社会的規範となるように行動すること、それは高次な共同社会の必須の条件であり、共同社会人自体の不可欠の要素であることを忘れるものではない。

新島先生とロゴスの意味

ことに同志社のような設立精神の明確な高い意義をもっている学園においては、聖書の新訳の意味についてのロゴスが重要であると信じている。したがってこの第一の意味において、わたくしはロゴスを高く価値づける。昨年わたくしは総長という重大な役目を受け継いだとき、甚だしく僭越とは考えたけれど一応は「ことば」としての、同志社教育の方針を、五つの学園憲章として述べた。もちろん同志社に長年学んだ一人として、また一教授として、ごくあたりまえのことであり、あたりまえの教育担当者としての宣言である。しかし、いまもわたくしはその方針を変えて

いないし、変えないのみか、ロゴスの第二の重要な意義においてそのことが良く実現しているかどうかをおそれている。学問というものの、教育というものの、学園生活というものは、一朝一夕に立ち直るものでなく、いくら美しい言葉を掲げて、いわば論言汗のごとく発しても急に効果があがるわけではなく、実に長い間の真剣な努力によって、ようやくその光明を見出すというようなものであることは、東西千年の歴史の事実が実証しているとおりである。しかし、あくまで高い立場の美しい訓言は必要である。同志社では「新島精神」である。しかしその抽象的な言葉・論言をわたくしは、むしろ事実としての新島襄先生の実践において捉えたい。わたくしの心を打つものは、先生が御臨終に近いころ、卒業生に与えた言葉である。それは旧約聖書出埃土記第十五章二十二節を掲げて「いま諸君を此苦き社会に送り出すのは恰も神が苦き水をあまくする樹として示された樹の枝を折ってメラの苦き水に投ずるようなものである。諸君は宜しくこれを甘くするの力を有すべきである」と。それは良心を手腕に運用し、知識を実践に生かすことであって、哲学者のように世界をいろいろに解釈するだけでなく、これをはよりよくつくりかえること、そのことである。先生の問題意識は実践意欲と結びついている。内村鑑三先生のキリスト者としての生涯の問題意識が、人間の、自分の、「死」ということと「罪の意識」ということに特徴的に煮つめられるとすれば、新島先生の問題意

識は、良心を手腕に運用し、現実には、メラの水を、苦き社会を甘き水に変えることである。世界をいろいろに解釈することではなく、これを良心と手腕においてよりよくつくり変えてゆくことである。内村・新島の勝れた両キリスト教先駆者の特質と相違とをわたくしはここに認めているのである。新島先生が明治二十年六月、仙台の一族舎から卒業生に与えた言葉―手紙はなおつづく。曰く「進め、好男児、決して退歩の策を為す勿れ。諸君よ。今日のわが日本の改良は、襄、諸君に望むにあらずして將た何人にか之を望まん。然れども誤つて尊大の思を為す勿れ、いよいよ謹みますます勉め、一身を天父に任せ義以一駆を邦家に抛ち志操をして清からしめ目的をして高からしめ、尚進て真理の源泉に遡り學術の奥蘊を究め歴史の沿革を探り、人事の秘訣を弁へ、泰然として書生の資格を備へ、兀然として学者の品位を保ち、英意勇進些々たる障碍のために避易せず区々たる情実の為に牽制せられず、天父の諸君に負せ賜ひし所の義務を尽し、自分を竭し賜はん事、襄の諸君に向い切望して止まざる所なり……」。……「諸君よ、裏宿痼の爲、東奥にあり、卿等卒業の式に臨むを得ざるは深く遺憾とする所なり、諸君よ、希くばますます遠大の策を立て身靈を安全に保護し、襄をして再会を得せしめよ。書万一を竭さず。敬白」と先生の切々たるこの訓言・激励にまことに現実的で、地についた「業」であり、懦夫（だふ）をして立たしめるの概がある。ことにその附言に曰う。「前書

は草稿なり、裏書き終て胸痛を覚へたれば再び之を清書するの元氣を失ひたり。伏て草稿のまま諸君に呈す、伏て乱文を怒せられよ」と。その熱誠の意は紙面に溢れており、先生の生徒への愛情が胸痛きまでも感得できるのである。先生の人に対する鄭重な態度、たとえば生徒に向つて「自分を竭し賜はん事」とか「卿等」とかという言葉が見え、附言にも、いかにも草稿として実証されるように「伏て」という言葉を二度も（文章を推敲。訂正もせずに）使つておられるがごときそれである。

わたくし同志社教育に当るもの、これ以上のいかなる言葉并要求し、附言し、重ねようとするのか。よく人びとは、教育担当者に、精神教育なり、同志社方針なりを多くその「ことば」において求める。同志社の教育方針は、新島先生の大学設立の趣意書なり、先生の多くの書簡と、先生の数冊の伝記と、同志社新島研究会発行の「開校事情」なり、に十分である。「ことば」を要求するものの多くは、同志社のこれら教育方針を熟続しない人びとである。てっとり早く、何か「結論」や「真理」や「精神」を知ろうとする安易な態度の人びとである。若き人びとの学究的な態度の欠陥は、ことを「要するにどうなのか」、「てっとり早く言つてどうなのか」、「結論的にどうなのか」と問う安易な態度自体である。学問研究や、精神的追求の世界においては、「虎の巻」は絶対に存在しない。あくまで地道に、不斷に、執拗に実践して行くことである。Wort^{ワート}はなへ Sinn

でもなく、単なる Kraft^{クラフト}でもない。日ごとの Tat^{タト}の積み重ねである。「この秋は雨か嵐か知らねども、今日のつとめの草を採るかな」と吟じた二宮尊徳の地味な実践意欲を想う。それは職務と労働への打ち込み方である。「業」であり「実践」である。

全同志社人とロゴス

新島先生は同志社創立と経営のために、その設立の趣意に添う同志社人教育のために生涯を打ち込まれたので、いわばその「仕事」に、その「行動」に、その「業」に「魅せられたる魂」であった。キリスト教においては、職業はドイツ語の Beruf^{ベルフ}であり、神の召命 berufen^{ベレン}としての職業として、使命感・義務感を伴うものである。その忠実な実践のために心を打ち込んで働らく「魅せられたる魂」となることが必然的に要求される。同志社の教育を担当するわれわれは、まさにそれではなければならない。職務を、勤労を、そのための労働を、手段としてでなく、それをば主體的に把握し、わがものとして実践することである。「初めにロゴスありき」、「初めに業ありき」というフアウスト博士の言葉の意図するところは、ここにあるものと考ええる。わたくしは、いつも多くの人びとから、同志社教育の方針を訊ねられ、その言葉としての教育体系を求められる。いまやら言葉のうえでの体系を宣言しても、新島先生

の「卒業生に與うる」言葉の一つだにもおぼふでない。

第一、わたくしたち同志社人はよい同志社をつくりましよう。

第二、わたくしたちは人間性を尊重し、学園に真の自由と平等とを実現しましょう。

第三、わたくしたちは、国際友好主義と平和主義に立ちましよう。

第四、わたくしたちは、学園内を美しく清潔に保ちましよう。

第五、わたくしたちは、よく学び、また明朗に楽しく健康な学園生活を築きましよう。

こうしたことは、單に学生への同志社教育のみのことではない、教員も職員も、挙つて一丸となつて実践すべきことであつて、ことば——「言・語・言葉」「道」——の世界を踏み越えた「業」(わざ)の世界のことであり、「行い」と「行動」と訓なり実践の問題である。そのわづかでも実践することは新島先生の遺訓なり、設立の趣旨なりに添ふことである。この五つの学園憲章を、もし言葉をもつて組織立て、体系化して答案をつくるならばあるいは八十点を克ちうるものが可能かもしれない。しかしそうした言葉での八十点が何にならうか。わたくしは、そのことを「実践」の問題として、「業」の世界において、生涯をかけて、もし六十点でも克ちとることが出来るならば、そのことが学園同志社にとって遙かに意義深いものと信じて

いる。

たとえばその第五の最も手近かな問題にしても、去年まで、屑紙、塵紙、ビラで眼も当てられぬほど汚れていた教室や構内が、この春から見違えるほど美しくなつてゐる。これは学内の心ある人びとと作業員諸君の不断的努力の結果である。学生有志としての「新島精神研究会」員やアモスト館の学生たちを中心とした六、七十名の学生諸君による「学園を美しくする会」というグループの自主的な意欲的な見えざる日ごとの「業」を輕視することはできない。これらの学生たちによつて、「同志社学園を語る」まじめな会合はすでに七、八回も催され、討議と反省とが加えられてゐる。隅の親石ともいふべきであらう。そういうとすぐ、形ばかりが良くなつても精神が強調されなければ何になるか、という反駁が予想される。そのようなことは、すでに述べたように第一の初歩的なロゴスである。ここでの問題は、ロゴスのファウスト博士的問題として揺りあげてゐるのであることを再び繰返しておきたい。そのことこそ「初めにロゴスありき」である。再びゲートを持ち出してわたくしの意の足りないところを補つておきたい。

Wie das Gestrirn, ohne Hast aber ohne Rast!

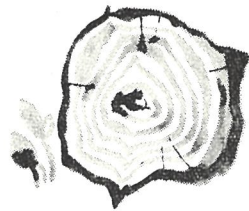
—J.W.v. Goethe—

星のごとく急がず、休まず、よき同志社と同志社人として挙つてみづからを生成・發展せしめよう。

(同志社総長)

その後のジェーンズ

重久篤太郎



熊本バンド

木下順二氏の戯曲「風浪」を読んだ人は、

明治九年の晩春、熊本の洋学校教師館で、窓硝子を破る投石と罵声の中に聖書を説き、讃美歌をうたう「ヂェインズ大尉」というアメリカ教師の名前を記憶しているかも知れない。あるいは、プロテスタント伝道史をひもといいた説者ならば、熊本バンドという一団の背後にキャプテン、ジェーンズのことを思い出すであろう。

明治初年、横井小楠の二人の甥左平太と太平はアメリカで学んで帰って、西洋文明輸入の必要を唱えた。太平は熊本洋学校を設立す

る仕事に没頭したが、明治四年四月の洋学校の開校式を待たずに死んだ。彼がフルベッキに人選を依頼して明治四年八月に招いたのがアメリカ人教師ジェーンズ砲兵大尉である。

明治五年の「府県御雇外国人姓名一覧」には、

熊本県米カピテーンセーンス 辛末八月ヨ

リ三カ年 練職兵務

と見えているが、実際は明治四年八月から同九年十月頃まで熊本洋学校の教師として、英語による普通教育を全科一人で受け持った。

ジェーンズは熱心なキリスト信徒であったが、熊本藩の気風を心得ていて、はじめの間

は宗教のことは一言も生徒に語らなかった。

彼がはじめて、欧米文明の基礎はキリスト教の信念にあることを説いて、有志を勧めて毎日曜自宅で聖書を講義したのは、生徒が英語を解しはじめた明治七年頃であった。生徒たちは賛否の二つの派に分れたが、彼の聖書講義に出席する者の中には信仰の念を起すものが続出してきて、九年一月には、ジェーンズの感化をうけて奮起した一団が、熊本西郊の花岡山に上って、「奉教趣意書」を朗読して宣誓をした。これに署名したものには、宮川経輝、金森通倫、海老名弾正、徳富猪一郎、横井時雄、浮田和民、市原盛宏などがいた。小崎弘道はすでに卒業して教師格であり、山

崎為徳は東京の開成学校に在学中であったので、ともにこの趣意書の署名には加わっていない。しかし、小崎と山崎の両人は同志社に入学して来て、この一団と行を共にした。

花岡山の誓約のことが世間に聞えると、キリスト教に対する迫害がいろいろな形ではじまり、洋学校もこれが主な動機となって九年夏閉鎖された。

洋学校閉鎖後の生徒の修業継続に心を痛めたジェーンズは、同年秋これら青年を開校間もない同志社英学校に送った。こうして熊本から来た青年の一団は同志社の形成に寄与



左 マンスフェルト 右 ジェーンズ

し、また自治の気風とビューリタンの校風をつくるなど、同志社発展の基をきづいた。徳富蘇峰は、「若し明治の上期に於て外来教師の我国青年教育に最も効果を奏したるものを求めば、札幌に於けるクラーク、熊本に於けるジェーンズを以て其の東西に於ける横綱というも誇張ではあるまい。」(三代人物史伝)と評価しているが、ジェーンズは、教育者として来日したのであるが、恰もキリスト教宣教師のような役割を演じた者として多くの人々に記憶されている。

新資料の発見

しかし熊本を去った後の彼のことは、僅に熊本バンドの人々の追憶の中に断続的に語られているに過ぎない。彼はアメリカン・ボードから同志社の教師として派遣される了解を得たが、家庭の紛争とそれに関連する宣教師との間の感情のもつれなどがあって、そのこ

とは実現しなかった。さらにそのためにジェーンズは過去の人として取扱われ、大阪英語学校教師時代以降、三たび英語教師としてわが国の英語教育に尽した業績も全く忘れられている。

この夏、京都大学の阪倉篤義教授の好意で第三高等学校関係文書を閲読することを得たが、その中にはジェーンズの伝記に関する至つて貴重な資料が散見しているのを見出した。三十年ぶりに再読したものもあったが、いままて明確でなかった彼のフル・ネームや生年月をはじめ、英語教師としての彼の事蹟を知る重要な手がかりとなるものが記録されているのには多大の興味を覚えた。

ジェーンズの名は、彼自身の書簡や条約書においてさえ J. Jang と記されているのみでそのフル・ネームが書かれていない。従つてジェーンズのフル・ネームはいろいろと誤つて書かれていて、熊本バンドの研究者もそのことを解明することがなかった。

しかし、これは筆者を含めて資料の探訪が十分でなかったため、例えば、「第三高等学校一覽」(明治二十六年)と「第三高等学校一

known.
 Leroy Lansing James
 Treadon, Tuscarawas Co. Ohio. U.
 S. Army Officer, Captain of Artillery.
 Is Instructor at West Point &c. Prof. of
 Ethics and English Language & Literature
 Military Trainer. Literature
 Capt. James's birth day March 2nd 1838 -
 34 Mrs. James " " October 15th 1860

覧「明治二十七年」の「備外国教員」の項には、

英語 レイ・レーニング・ゼーンズ 米国

Leroy Lancing James

と明記されている。

明治廿六年八月廿八日、学校長 折田彦市
 から文部大臣井上毅にあてた「外国教師備入
 御届」に添えた付記には次のごとく記されて
 いる。

レイ・レーニング・ゼーンズ
 Leroy Lancing James

一 本籍 北米合衆国オハイオ州トレント
 ン、タスカワス会社

一 年齢 西暦一千八百三十八年三月廿七日
 生

一 学位 無之

一 旧職業 合衆国砲兵大尉、ウエスト、ポ
 イント学校等ニアリテ倫理学、英語学及英
 文学教授

一 妻 フロラ・ゼーンズ
 Flora James

一 備入手続 京都同志社校長 小崎弘道紹
 介

一 来航旅費 無之

一 手当 無之

一 居所 第三高等中学校構内第式番教師館

ジェーンズの第三高等中学校備入は、横井
 時雄の世話によるものとされていたが、これ
 によつても小崎弘道の紹介によるものであつ
 たことがわかる。ジェーンズの宿所姓名に対
 する回答を記した小崎弘道から第三高等中学
 校教授の田村初太郎宛の書簡もあるので、そ
 の間の消息もわかる。

一八九三年（明治二十六年）八月二十九日
 付で、当時第三高等中学校教授兼教務主任の
 服部宇之吉からの問合せに答えたジェーンズ
 の自筆の回答と、服部教授の反訳が現存して
 いる（写真参照）。七十年も前に書かれたもので
 青インキの文字は写真では不鮮明なところも
 あるが、この回答にジェーンズはそのフル・
 ネームを“Leroy Lancing James”と記して
 いる。この自筆の回答は、「三高一覽」とともに
 彼のフル・ネームを伝える重要な資料と言わ
 ねばならない。

明治二十六年八月備入および同三十年八月
 再備入の際の折田彦市校長とジェーンズと
 の間に取り結んだ条約の英文二通ともに、
 “L. L. James”と自署しているが、ただ明治
 二十八年四月から同年七月までの備継の条約
 には“Leroy L. James”と署名している。

服部宇之吉教授の反訳に、「本籍 北米合衆国オハイオ州トレントン、タスカラワス会社」とあるが、この「タスカラワス会社」は英文の回答に「Tuscarawas Co.」と County を Co. と略記したので、それを Company の略語と読み誤つたためであることがわかる。

大阪・京都時代

大阪英語学校以来三度にわたるジェーンズ傭入れの資料のすべてを記すことは頁数の許さぬところであるが、三高教師時代は彼の生

涯でも今日まで埋没していた部分にあたり、しかも評価されていないので、彼の在職の年々だけでも録しておこう。

熊本洋学校を解傭されたのち、ジェーンズは帰国する予定であつたが、大阪英語学校校長高良二から再三の交渉をうけて、なお日本に滞在して教育界に尽すことになった。一方では高良二校長は「熊本洋学校旧雇米人ケビテン、ゼーンズと申者学力頗ル優等ニシテ適任之人物」であるので、明治九年十一月一日から同十一年七月三十一日まで給料一ヵ月金二百五十円で雇入結約を

服部宇之吉

一、レレイ、レーイング、ゼーンズ
二、熊本合衆オハイオ州トレントン、タスカラワス会社
三、熊本合衆オハイオ州トレントン、タスカラワス会社
四、熊本合衆オハイオ州トレントン、タスカラワス会社
五、熊本合衆オハイオ州トレントン、タスカラワス会社
六、熊本合衆オハイオ州トレントン、タスカラワス会社
七、熊本合衆オハイオ州トレントン、タスカラワス会社
八、熊本合衆オハイオ州トレントン、タスカラワス会社
九、熊本合衆オハイオ州トレントン、タスカラワス会社
十、熊本合衆オハイオ州トレントン、タスカラワス会社

して、大阪英語学校外国教員の主任とした。

その後、ジェーンズは帰米して十年あまり消息をたつたが、明治二十二年に横井時雄が、同二十五年には浮田和民が彼を訪ねている。その時ジェーンズはミシガン州アーン・アールで農耕に従事していた。ところが明

治二十六年八月二十五日から同二十七年八月三日まで、小崎弘道の紹介で第三高等中学校の英語教員として傭入れられ、給料一ヵ月二百円を支給された。それから同二十七年八月と二十八年四月とに再度の傭継があつて、同二十八年七月三十一日満期解傭となつた。それは学制改革のために大学予科が廃止されたからであつた。再び大学予科が設置されるまでの二年間の三高には、ジェーンズが解傭されてからは一人の外国人教師もいなかったのである。

明治二十九年六月京都を去つてから、ジェーンズは、鹿児島高等中学造士館の英語教師に転じた。ここでも学制の変化があつて、同二十九年九月には廃校となり、生徒は他の高等学校に転学した。ついで、同年十二月に県立の鹿児島尋常中学造士館となつた。

しかるに、明治三十年八月、第三高等学校に大学予科が復活して設置されたので、ジェーンズは同年八月一日から同三十二年七月三十一日まで日本通貨で月二百円を支給されて同校英語教師に再び傭入されたのである。同三十年十一月には奏任に準じた身分取扱いとなり、同三十一年七月一日には月二百五十円

に増給された。同校唯一人の備外国教員として在職二年の後、同三十二年七月三十一日満期解僱となった。この時、ジェーンズは年齒ようやく老いて、帰国することとなった。

三高生の見たゼンス大尉

第三高等学校の英語教師としてジェーンズの評価を知り得る根本資料は甚だ乏しい。それでも、これだけの彼の経歴から考えてみても、いかに彼が英語教師として折田彦市校長らの信頼を得ていたことが推測される。一方では大学予科の英語教師として学生への反響は、三高の学友会誌である「嶽水会雑誌」の中で語られている。この雑誌の第三号（明治三十二年十二月）には「我國におけるゼンス大尉」（鷗軒生）があり、同じ号の雑報には「ゼンス教師を送る」が書かれている。雑報は無記名でその筆者はわからないが、その時の大学予科雑誌部編輯員には厨川辰夫がいた。

学生はジェーンズへの錢別にスタンダード大辞典をおくって彼らの謝意を表明したが、さらに二年後の同誌第十号（明治三十四年四月）には鬼斗子が「ゼンス大尉を思ふ」と題した一文をかかっている。それらのいずれの文

章においても、学生たちの最も心をとらえたのはジェーンズの直剣な態度であつたことを物語っている。また彼は教場において「恰も勇士戦場に起て、士卒を激励するがごとく、談論風生、謹嚴熱意を以て」教え、「熱誠以てこれに当られしかば、聴く者皆時を移るを知らざりき」と学生たちは、熱誠家としてのジェーンズを慈父のごとくに景仰し、追慕していることが知られる。ある彼の伝記編者のように、第三高等学校時代を彼の失意の時代とするのは、資料の不足から来る誤りである。

吉野作造博士はジェーンズ自筆の日記が同志社に秘蔵されているので、何とかして公開したいと考えたが、いまはその所在は明らかではない。また浮田和民博士によつて早稲田大学にジェーンズの遺稿などが托されたというが、未だその方面の発表のことを聞かない。今後のジェーンズ研究は、埋没した資料の探索と発見によつて彼の生涯の不明な部分を裏証して行くとともに、これまで評価されていなかった彼の大阪英語学校以来の仕事を含めて考察することが必要であらう。

以上記しおわつてから、砂川千秋氏から「三

高八十年回顧」（大浦八郎氏編、昭和二十五年四月関書院を借覧した。その中に収録されている明治三十三年卒業の小豆沢英男氏の「五十年前の思ひ出」）には、三高大学予科復活時代のジェーンズを語っているので、当時の文科の学生の見たジェーンズの一面を知る資料として、次に付記しておこう。

英語の先生に大尉ゼンス先生があつた。体軀堂堂元氣旺盛四隣を庄する有様で、大学予科復活によつて再び三高へ來られたのである。先生はアブラハム・リンカーンを崇拜し、談一度人道問題に及べば、授業をそつち除けにして堂々と演説をされ、一時間とは立処に過ぎ去つてしまふ。吾々は準備が出来なくて出席した時は、先生をここに引き出すに苦心したものである。先生は昔は熱心なクリスチャンであつたが、当時は絶対に反対で、耶穌教の不合理を説き、宣教師は悪魔なりと叫ばれて居た。先生の感化力は強く一方アブラハム・リンカーンの人道論と他方耶穌反對の説が、今も猶五十年後余の頭に滲み通つて居り感化力といふものは恐ろしいものであると驚て居る。

（校友・京都市立美大教授）